

『三升増鱗祖』について（二）

松 原 哲 子

本稿では、本誌第七十七号（平成二十二年三月）に続き、安永六年刊『三升増鱗祖』について取り上げ、上中下各巻の注釈を試みる。

各巻をそれぞれいくつかの場面に分けて梗概を挙げ、適宜注釈を加える。

【上巻】

○ 昔、近江国伊吹山の麓に永持道意という者がいた。元は藤原氏の歴々だったが、保元の乱を避けて引込み、蓬から艾を製造し、商売としていた。ある時、道意が艾作りに疲れて徹睡んでいると、池州稲荷の霊夢をみる。池

州稲荷は、自分は伊豆国山内屋の地に住む稲荷で、今宵源義朝の三男頼朝がこの地に来るが、彼には将来天下を掌握し、四海太平を成すことができる寛仁大度の相がある、影身を離れずに彼を盛り立てれば、お前の行く末は富み栄えるだろうと告げる（一丁表）。

作品冒頭、池州稲荷が永持道意の夢に登場する場面だが、「善哉〜」の言葉と共に、片手を挙げながら現れるという表現は、既存の草双紙に盛んに利用されたものである。多くは雲に乗り、宙に浮いた姿で描かれるが、ここでは道意の背後に立っている。ただし、十五丁表および下巻の絵題籤に描かれる池州稲荷には雲が伴う。告げの言葉の最後に「ゆめ〜疑ふことなかれ」とあるのも常套句。

微睡む道意の周囲には、艾を取めた箱と、紙袋、艾の塊などが描かれ、後に店の商標や艾の包装が変更される際の伏線となっている。

○ 頼朝は石山寺から単身伊吹山に落ち、道意の家の辺りをさまよっていた。それを見つけた道意は大いに喜び、かくまって世話をする。そんな折、平家の武士弥平兵衛宗清が追っかけて来て、頼朝を生け捕りにする。宗清は、まずは都に赴き、池禪尼に願ひ出れば生命は助かるだろう、遠流に決まったなら、頼朝に付き添い、行く末を見届けるよう道意に告げる（一丁裏）。池禪尼の情けによって頼朝は伊豆国へ遠流と決まる。道意は池州稻荷の告げは間違いないと大いに喜び、六波羅に願ひ出た上で頼朝に同行する（二丁表）。

頼朝の敗戦、弥平兵衛宗清の登場、池禪尼のとりなしなどの一連の流れについては『平治物語』に依る。

一丁裏で甲冑に身を包んだ頼朝は、二丁表では一転し、笠を被り、杖を手にした旅姿となっている。上巻絵題簽には、着物に笹竜胆を配し、尻鞆を腰に据えた頼朝らしき人物が描かれるが、この人物が被っているのは外国風の黒笠となっている。

二丁表の場面が旅路にあることを強調するものとしては、他に「住み慣れし都の富士を後に見て 雪の斑消四方白く 夕日照り添ふ四方の赤 これを合て八景や 勢田の長橋 勢田鰻 ぬらりくらりと行く程に 名残近江の源五郎 ふな路を渡り 山を越へ」という詞章がある。（注）これは、住み慣れた都の象徴である比叡山を背に、伊豆国へと向かう様子を表現したものである。勢田の夕照を示す部分があるので、「八景」とは近江八景を指す。「勢田の長橋」「勢田鰻」「源五郎鮒」は近江国の名所・名物であり、『近江名所図会』（文化十一年）にもそれぞれ取り上げられている。「雪」の「白」と「夕日」の「赤」が対比されているが、「四方の赤」は「鯛の味噌ずに四方のあか」の形で定型化され、大田南畝の狂名の由来ともなった語句を意識したものと考えられる。「ぬらりくらりと」は勢田鰻の縁語、「ふな路」は「源五郎鮒」と「船路」の掛詞となっている。旅の途次の地名・事物を順に読み込んでおり、若衆姿の頼朝と道意の二人の姿が、さながら「道行」のように表現されている。

他にも、道意の科白「今宵のお泊まりでは飯盛りをあやなしかけませふ。君にも少しお楽しみ。しかし、指の股にお心付られませ」は、宿場女郎と鼻緒擦れを話題にすることによって、旅路にあることを強調したものと考えられる。

○ 頼朝を伴って伊豆国に到着した道意は、池州稲荷の側で艾商売を始める。当時、東国に無かった切り艾を取り扱って重宝され、商売は繁盛する。頼朝は、若衆盛りの容貌が故人盛府にそのままだと評判となり、道意はそれに因んで、艾の意匠を市松染めにする。

一方その頃、道意の隣家に山内屋孫兵衛がいた。これも由緒ある者であったが、度重なる兵乱に落ちぶれ、今はこの地で、古今の事を書き綴って草紙にしたり、昔の名将・勇士を漆絵にして商い、繁盛していた(二丁裏・三丁表)。

道意の商売繁盛の要因として、まず、当時東国では切艾が珍しかったことを挙げている。この記事にはある程度の信憑性が認められるようで、例えば、『親子草』(寛政九年序、喜田有順著)には以下の様な記事がみられる。

十四、灸治の事

大人、小児とも灸治いたし候に、我等など幼年の時分迄は、当時のごとく、大中小、小児など、いふ艾は曾て無之、大体は袋艾を調べ、ひねり申候(中略)もぐさ屋も、通り旅籠丁三升屋平左衛門に有之候外は、余り無之様に覚申候、夫に付、三十五ヶ年以前(明和

元)小船町辺にて、三升屋平左衛門の艾を似せ候て商売いたし候処、平左衛門より及公訴、申分難相分、たしか遠島に被仰付候由、覚居申候、さすれば、世上に類見世少きかと被存候

(『新燕石十種第一巻』中央公論社、昭和五五年)
右のように、艾は古くは大中小や小児用などの区別はなく、袋入りのものを適宜ひねって使用していたが、後に切り艾が発明されたとされる。さらに、明和ごろには三升屋の艾を真似て商売をした店が公訴され、遠島に仰せ付けられたとあり、このころ、三升屋は江戸で一番の艾店であったことが窺われる。

二丁裏には、艾を紙で巻こうとしている頼朝と、土器に「中」「小」などと記している道意の姿が描かれる。これらは、紙に巻いて細かく裁断する切り艾と、その容器を作製している図である。切り艾については、『江戸買物独案内』(文政七年序、中川五郎左衛門編)の三升屋平左衛門の項に「元祖／御葉切艾／元来切艾と申事我家にてこしらへはじめ諸国へ売弘メ申候／くんさい葉灸／神仙秘伝家伝／諸病之妙灸」とあり、三升屋がその始祖と認識されていたと考えられる。容器の土器も三升屋と強く結びつくものだったようで、安永五年の川柳評万句合に「土器(注3)へとなり(注3)の書物きさみこみ隣は鱗形屋」の句があり、隣同士で

あつた三升屋と鱗形屋とを取り合せている。^(注4)この場合と、一丁表の伊吹山での道意の商売の様子とを対照的に描くことによつて、読者に対して視覚的な効果を狙つたものと考えられる。

道意の商売繁盛の要因として次に挙げられるのは、若衆盛りの頼朝の容貌である。「故人盛府にそのまま」と、宝暦十二年に没してしまつた初世の佐野川市松をわざわざ引き合いに出すのは、三升屋の商品の意匠にこじつける意図に依るものか。先掲の『江戸買物独案内』にも商品の包装の意匠は描かれておらず、確認は出来ないが、『三升増鱗祖』の主旨が両店の宣伝にあることを考えれば、安永期の三升屋の商品には市松模様が配されていたものと考えられる。

反対側の三丁表には山内屋孫兵衛の姿が描かれる。「古今の事を書き綴り双紙となし 昔の名将・勇士の姿を紙に摺り彩色をなして商ひければ ことの外はやりける 其頃は諸人此絵を漆絵と言ひて うれしがり 売れること限りなし」と、同音繰り返しの言葉遊びを交えながら、鱗形屋板の出版活動を簡潔に記し、挿絵には草双紙を糸で綴じている孫兵衛と、その背後に漆絵が陳列される様子を描いている。

道意と孫兵衛およびそれぞれの店は丁の切れ目を境には

ば線対称に描かれ、中央には遠近法を用いて描かれた池州稲荷が配されている。両店の暖簾には円にかたばみの紋と「四陽堂」の文字、円に土佐栢の紋と「山内屋」の文字がみえ、後半の、褒美として三升の紋と平の氏および鱗の紋を与えられる場面の伏線となつている。

○ ある夜の暁、池州稲荷が山内屋孫兵衛の枕上に立ち、隣家の若衆は義朝三男頼朝なので、道意と心を合わせて世に出せば、天下一統の後、お前も家が富み栄えるだろうと新たに告げ、障子の穴から飛び去る(三丁裏)。その頃、伊豆国には北條四郎時政が高祿を領し、家富み栄えていた。山内屋孫兵衛は、奥方の御用を承り、商売は繁盛していた(四丁表)。

三丁裏は孫兵衛に対する夢の告げの場面だが、一丁表の道意の場合とは構図を変え、詞章も簡略化している。時刻も暁に変更し、障子越しに孫兵衛の影のみを描くなど、描き方に工夫がみられる。夜回りの者の「あ、寝忘れたも、う何時だしらぬ」という科白は暁という時刻を意識して挿入したものと考えられる。

四丁表では、後半の頼朝と政子姫との仲を取り持つ伏線として、北條時政の邸に向き、腰元せきや等女性たちを

相手に商売をする孫兵衛が描かれる。女性たちに見せているのは、青本および黒本とみられる二枚題簽の中本の数々と、一枚絵である。孫兵衛が「せきや様　これを御覽被成ませ　市村の狂言本でござります」と差し出すのは青本体裁の中本で、狂言絵尽が草双紙と同様に扱われている。^(注5)対し、せきやは「これ本屋どん　今度の絵の良い観音経を持つてきておくれ」と言っている。「絵の良い観音経」が具体的に何を指すのかは確認できていないが、視覚的に楽しめるような中本体裁のものを想定しておきたい。本を眺めながら女性たちは「ほんにばからしいの」「これを御覽けしからんの」と言葉を交わしている。「ばからしい」「けしからん」は共に明和初年ごろ吉原や深川の女郎衆が言い始め、次第に一般に広がった語句であるので、北條時政邸という場所柄とのギャップを表現効果として狙ったものと推察される。

○ 頼朝は、艾を卸す途中に立ち寄った鶴岡八幡宮で時政の娘政子に出会い、互いに見初め合う（四丁裏・五丁表）。政子姫は恋煩いとなり、朝夕の食事も進まず、手医者くだす流庵は灸治を勧める（五丁裏）。

二人が互いを見初める場面である。頼朝は政子姫を「さ

ても美しい　路考・幸朝にいろはを加味したお姫さん」と評する。「路考」は三世瀬川菊之丞を指す。管見の限り、黒本青本で美しい女性を描写する際に最も多く引き合いに出される名である。「幸朝」は初世尾上民藏、「いろは」は初世芳沢いろはだが、一人の女性を評するのに三名も挙げるのは非常に珍しい。三名とも安永五年に江戸三座での出演が確認されるので、^(注6)既存の草双紙にありがちな男女見初めの場面を、当時のめぼしい女形を列挙することによって変化を持たせる意図があつたものか。一方、頼朝を見た政子姫は「市川門之介が舞台顔に生き写し」と評価する。この門之介は二世で、若衆方を得意とし、安永期の若手四天王の一人とされた人気役者である。^(注7)

鶴岡八幡宮の手水舎に奉納された三枚の手拭いの内、二枚には駄目押しのように円にかたばみ、円に土佐栢の紋と「山の」の文字がそれぞれ配されている。三枚目には、円に打違いの葉の紋と「久に」の文字がみえるが、典拠については不明。

【中巻】

○ くだす流庵の指図で灸治が施されることとなったが、その際に山内屋孫兵衛も呼び寄せられる。孫兵衛は唐紙

表紙をはじめ、青本・赤本・黒表紙・一枚の漆絵などの、新板古板の数々を取り集めて持参し、政子姫の灸治の慰めとした。腰元のせきやは木陰に孫兵衛を呼び、政子姫の御病気の原因は、鶴岡八幡宮参詣の折、頼朝を見初めた為だと告げ、仲を取り持つよう依頼する。孫兵衛はそれを快諾する（六丁表）。孫兵衛は、何とかして頼朝を政子姫と忍び逢わせ、ゆくゆくは頼朝を時政の婿にし、世に出そうと思ひ、腰元せきやと示し合わせ、灸治の艾の御用を道意に仰せつけ下さるよう奥家老に願ひ、許される（六丁裏）。孫兵衛は艾屋に来て、政子姫の病気と艾の御用の旨を伝える。また、池州稻荷の告げについても語り、共に力を合わせて頼朝を世に出そうと提案する。道意は孫兵衛の志を感じ、頼朝から預かった白旗を取り出し、心底を明かし、協力を誓う（七丁表）。

六丁表で孫兵衛が政子姫のために持参するのは、唐紙表紙、青本、赤本、黒表紙、一枚の漆絵の数々である。それらの、新板と古板を各種取りそろえて持参したとする。唐紙表紙は、寛文ごろから享保ごろまで江戸で出版された絵入浄瑠璃正本類を指す。『三升増鱗祖』の翌年刊行の『辞闘戦新根』では、唐紙表紙と草双紙とを性質の異なるものとして明確に分けて趣向に取り入れているが、^(注8)ここでは刊

行年代や性質に関係なく、鱗形屋の商売物として列挙している。ただし、挿絵に実際に描かれるのは草双紙と一枚絵のみである。草双紙に貼付された題簽は、これまで登場した二枚題簽の他に、中央に題名を配した一枚題簽がみえる。これは、安永五年に用いた一枚題簽の意匠を模したものと考えられる。

「その若衆 とんと新車に生き写し」の「新車」は先掲の市川門之介の俳名。

七丁表の二人が協力を誓う場面で、白旗を手にした道意は「こうした所は矢口の渡の道念といふきみなれど」と発言する。これは明和七年（一七七〇）江戸外記座初演の浄瑠璃「神霊矢口渡」四段目の、新田義美岑と御台が、兄義興の旗持であった道念から新田家の旗を渡され、矢口の渡に向かう場面によっている。この場面は大いに評判を取ったようで、安永六年六月刊の評判記『古今評判／儀多百量』に「近頃の大でき矢口の渡切より五段目迄ぬけめのなはいは此上るり」（『浄瑠璃評判記集成』演劇研究会、昭和三年）との記事もみえる。この書は古今の浄瑠璃を取り上げた、安永六年当時の浄瑠璃に対する評価を示すものなので、時流に乗った情報を作中に取り込むといった意図を無理に見出す必要はないかもしれないが、少なくとも読者にとって馴染みも受けもい趣向の挿入だと評価できる。

える（十丁裏）。

六丁裏七丁表で孫兵衛が実際に政子姫に奉ったのは二枚題箋の草双紙である。青本と黒本の二つの体裁があることから新板と古板の両方を持参したことがわかる。（注）

北條時政が円い窓から覗き込む図はやや不自然な印象を受ける描き方だが、この構図自体は黒本青本にはよく用いられたものである。時政の「娘と小袋には油断も隙もなるものではない」は、小袋はほころび易く、小娘は色気づき易いことから、油断のならないことを意味する譬言に拠っているが、ここでは文面通り、政子姫の頼朝への恋慕を指す。

付家老いけすか新五左衛門は『平治物語』には登場しない。江戸に馴れない田舎侍や、野暮な屋敷者の蔑称「新五左衛門」に因んで名付けられた、本作の創作である。十丁表の、夜着の四方を打ち付けられた時の新五左衛門の科白「せきや坊、そもじが愛しいばつかりで、此若衆をぐつと許してやりの鞘。蠟燭より大きな灸を据へるとは、又あんまりむご印むごいの根だ。どうぞ詫び言して許しておくれ。好いた男の難儀の場を笑つてゐるとは興がない。あ、熱や、耐へ難や。これにつけても懐かしいはひきのやのどらやきじや。さつまいもはなきか、幾代餅はをらぬか。で

○ 政子姫の灸治のため、道意は次の間に向いた。孫兵衛も灸治の気紛れのために仰せつけられた絵双紙をありたく持参する。政子姫は退屈することなく、熱さも忘れるほどに絵双紙に夢中になり、灸治ははかどる（七丁裏・八丁表）。腰元せきやは、人なき折を窺って、頼朝を居間に連れ来て、政子姫と逢わせる。政子姫は自分の病氣の原因は頼朝への恋心、灸は心中立てだと訴える。頼朝は時政への遠慮の言葉を口にするが、実はその様子を立ち聞きしていた時政は、頼朝ならば婿にとつて不足はないと思う（八丁裏・九丁表）。二人の気持ちが一一致したと思つた矢先、政子の付家老いけすか新五左衛門が現場を発見し、不義者だとして頼朝をさんざん打擲する。機転を利かせた腰元せきやは新五左衛門に色事を仕掛け、氣を許した新五左衛門は見逃す。頼朝は灸箸で新五左衛門の夜着の四隅を打ち付け、捕らえる（九丁裏・十丁表）。時政はかねてから艾屋の息子が源頼朝であると知っていたので、二人の祝言を調べ喜ぶ。政子姫の病氣が早くに本復したのは、道意の灸治のおかげだとして、艾屋には三升の家紋と、平の字を褒美に与える。また、灸治が退屈なく済んだのは草双紙をたくさん見たため、道意と同様の功だとして、孫兵衛には三ツ鱗の紋所を与

めへく」には、言葉遊びの表現が複数用いられている。

「ぐつと許してやりの鞘」は、「許してやり」と「槍の鞘」の掛詞的な表現。「あんまりむご印むごいの根」は「印」や「根」の字を字句の尾に付ける洒落で、作者恋川春町が鱗形屋板の黒本青本と強く結びつくものと認識していたものである。^(注10)「ひきのやのどらやき」と「どらやき」の取り合わせも、春町が鱗形屋板の黒本青本と結びつけて認識したものである。ただし、黒本青本での使用例の正しい形は「ひきのやのあんころ」であり、春町の記憶違いと考えられるが、この誤用は後の黄表紙に引き継がれていった。^(注11)

「幾世餅」は元禄以来の両国広小路小松屋の名物である。

【下巻】

○ その後、道意は武蔵国江戸へ下り、大伝馬丁三丁目、本名通旅籠丁に艾店を出し、三升の紋の中にかたばみの定紋を付け、三升屋平右衛門と名乗り、商いは繁盛する(十二丁表)。一方、孫兵衛も同丁三丁目に引越し、地の内に池州稻荷を勧請、鱗形屋孫兵衛と家名を改め、三升屋と軒を並べる。鱗形屋もまた絵双紙問屋の元祖と仰がれ、商売は繁盛し、富み栄える(十一丁裏・十二丁表)。

ここに至って、両店の商標が変更される。店先の客の「薰臍艾をくんさい」という科白は言葉遊びの表現だが、先掲の『江戸買物独案内』に「くんさい葉灸／神仙秘伝家伝／諸病之妙灸」とある。

○ 三升屋・鱗形屋の二人は伊豆国以来隣同士であって、頼朝の一件以来格別懇意にしている。奥底なく付き合っているようだが、実は二人とも内心は、自分の功績こそが大きいと自負し、相手が自分の手柄のように言いふらすのを快く思っていない。ある時、酒宴の席で二人が微睡んでしまうと、夢に互いの商売物の精霊が現れ、戦評定がなされる(十二丁裏・十三丁表)。初度の戦いは墨塗りで攻めた艾の軍勢に有利に運んだが(十三丁裏・十四丁表)、草双紙の軍勢も熱湯で反撃する。それがきっかけで湯晒し艾が生まれたと、こじつけたところで池州稻荷が白雲に乗って現れ、和談を調える(十四丁裏・十五丁表)。二人は夢から覚め、互いの胸の内を明かし、仲直りする(十五丁裏)。

両軍の兵はそれぞれの店の商売物で描かれている。三升屋側には、薰臍艾・千丁入艾・切艾・袋入艾・中・大の姿

がみえ、熱湯で攻撃された後には湯晒し艾が描かれる。鱗形屋よりも自分たちが優位であることの根拠として、「輟耕録の十三科にもすでに鍼灸科あり 艾の功能最も大にして病を除く いづれの書にも絵双紙を見て病ひを治すといふ事はなし」と、医学書の名を挙げ、権威付けをしている。

一方、鱗形屋側には、古状揃・正本・赤本・青本・黒本・一枚絵の姿が描かれる。「正本」とは浄瑠璃正本類を指すと思われるが、『辞闘戦新根』に「ここに享保年中のころまで出来たる江戸草双紙の始まり 正本というものあり 俗に唐紙表紙という」という一節があるので、先に取り上げられた「唐紙表紙」全体を指す可能性もある。ただし、『辞闘戦新根』では、登場人物として描かれた唐紙表紙には表紙にふさわしい紋様が描かれるが、本作十三丁表紙では無地表紙で、寸法も定かではない。

十四丁裏・十五丁表ではやや唐突に、かつ戦闘場面の隙間に小さく池州稻荷が登場する。どのように二人を論し、和解させたかを書き入れてはいるものの、稻荷の姿は非常に小さく上端に描かれている。この場面では、はじめに鱗形屋の軍の反撃がなされた後に、池州稻荷が登場し、古状揃が「あらありがたや いづれも稻荷の御託宣なるぞ 軍をまとめ 引取れ〜」と号令を出す展開となっているが、池州稻荷と古状揃の視線が噛み合わないなど、物語の展開

が十分挿絵で表現できていない。このことも、「やや木に竹を継いだやうな形」(森銑三『続黄表紙解題』中央公論社、昭和四七年)と評価される原因のひとつと考えられる。池州稻荷がお粗末に描かれるのに比して、最終十五丁裏には、両店の商売物である三升屋の湯晒し艾のパッケージと、鱗形屋の草双紙の表紙が、大きく紙面を割いて描かれている。これは、店の宣伝を作中に取り入れたことに眼目のある本作では当然のことといえる。ただし、艾の方が実際の商品を忠実に描いているのに対し、鱗形屋の『三升増鱗祖』の方は題簽の様式が異なる。十五丁裏には、一枚題簽で描かれるが、安永六年に刊行された鱗形屋板は二枚題簽を伴っている。背景を何本かの斜線によって分割し、それぞれに異なる柄を配置し、中央に題名を配するという題簽の意匠は前年安永五年のものである。鱗形屋は宝暦期以来、安永四年まで二枚題簽を採用していたが、安永五年で一枚題簽に変更する。安永六年に再び二枚題簽に戻し、翌安永七年には一枚題簽と、このころの鱗形屋は題簽について試行錯誤していたようで、その影響が本作に表れたものと解せる。

注1 本誌七十七号掲載の、翻字では「ぬらりくらりと行く程に」の詞章が、「源五郎」の後になっており、文意から

いつて相応しくないので訂正したい（小平沙来氏の御教示による）。

注2

本作品刊行の翌安永七年刊『辞闘戦新根』で、恋川春町は「鯛の味噌ず」「四方のあか」と一対のものとして登場させている。

注3

『雨譚註川柳評万句合』（水木真弓編、昭和四九年）参照。

注4

柳亭種彦はその書簡の中で、この句に関して以下のように記している。

文政十三年五月十三日付笠亭仙果宛

○川柳点 土器へ隣家の反古をきざみこみ 是ハ我ほめながら江戸にても小子をのけて聞てハあるまいかと
そんなし候 按に安永頃の句なるへし その時ハ聞へたれとも今でハさらに聞え不申 さて是より考へをしるす
（中略）柳亭曰 昔ハ切もぐさ白紙にてハせず 仏書其外關本の類の反古にて製したるもの也 此句土器といふハ土器に入たる艾あり 是も今ハすたりてた、う紙になり たま／＼なれてハなし その土器艾の流行せし頃の句也 団十郎艾江戸一番の艾屋にてその店ハ今もありその隣家に安永頃までハ鱗形屋孫兵衛か店あり 銅瓦のひさしにて是またたれしらぬ者なき絵さうし屋也 艾のかはらけへ隣家の鱗形屋の反古をきざみこみといふをかくして作りたる句也 今ハ切もぐさを反古にする事も絶え かはらけ艾はすたり 鱗形屋の店ハなくなりたれ

ハ 何ほと考へても知れる道理なし（以下略）。

（佐藤悟「柳亭種彦書簡集」『近世文学俯瞰』汲古書院、平成九年）

注5

画中孫兵衛が手にしているのは二枚題簽を伴った青本だが、現存する狂言絵尽についてみる限り、草双紙と狂言絵尽では題簽の様式が異なる。そこまでは描き分けていなかったか。

注6

『歌舞伎年表 第四卷』（岩波書店、昭和三四年）によれば、瀬川菊之丞、尾上民藏、芳沢いろはの三名の、安永五年の活動は以下のように確認される。

菊之丞 正月中村座、二月中村座、四月中村座、五月中村座、夏中村座、八月中村座、十一月市村座

民藏 四月中村座、十一月中村座

いろは 正月森田座、三月森田座、七月森田座、十一月中村座

一月中村座

三名ともこの時期江戸三座での出演が確認される。

注7

注6と同様に、市川門之介についても以下のように確認される。

門之介 正月森田座、三月森田座、五月森田座、七月森田座、十一月森田座

右のように、森田座への出演であり、芳沢いろはとの共演が複数確認される。

注8

拙稿「草双紙における流行語の位置」（『近世文芸』第六

十八号、平成十年六月）参照。

注9 拙稿「鱗形屋板絵外題考」（『近世文芸』第八十七号、平成二十年一月）参照。

注10 注8に同じ。

注11 拙稿「『草双紙年代記』考——上巻部分を中心として——」（『実践国文学』第六十九号、平成十八年三月）参照。

（まつばら のりこ・実践女子大学非常勤講師 実践女子大学
大学院博士課程平成十四年度単位取得満期退学）